

全科協ニュース

1975年1月1日発行
(通巻第21号)

全国科学博物館協議会

東京都台東区上野公園
国立科学博物館内
☎ 110
TEL.822-0111 (大代)

おもな内容：◇会員館園年頭の抱負 ◇無関心へのアプローチ (その2) 神奈川県立青少年センター 二宮健
◇入館者増加へのアプローチ 通信博物館 樋口次郎 ◇電気科学館の第6次改装 大阪市立電
気科学館 辰巳 博 ◇アメリカ全科協の紹介 国立科学博物館 鶴田総一郎 ◇全科協北から
南から 秋田大学鉱山学部付属鉱業博物館 高安泰助 ◇会員館園の紹介 松島水族館

年頭にあたって

昨年はコペンハーゲンで開催された ICOM 第10回大会に出席した。この大会は「博物館と近代世界」というテーマで、世界各国の博物館人約600人が参加して行われた。大会と同時に開催された多くの国際委員会を通じて、参加者が情報の交換やデスカッションを行い、世界の一流博物館人に接することによって、いろいろの知識を広めると同時に、各国の博物館が当面する問題がなにであるかを知ることができて頗る得るところがあった。

大会の冒頭デンマーク女王マルガレーテII世は、スピーチを行って「われわれが現在生きている時代は、うぬぼれでなく博物館時代と言うことができます。それは、近代的に設備された多数の博物館と、すでに古くから存在する博物館に対する人々の関心は非常に高いものがあるから。」と参加者を激励されたのである。この女王の「博物館時代」という言葉には、博物館をとりまく公衆—社会—とそれに対する博物館の使命というものを暗示したものであると思う。

われわれ博物館に関係している者は、これからも益々国際的視野を広めて近代社会における博物館の使命達成に邁進する覚悟が必要である。

それにつけて、報告しておきたいことは、日本の提案によるアジア地域博物館近代化会議がユネスコによって取り上げられ、今年11月ごろ東京においてユネスコ主催で開催される見通しとなったことである。アジア各国から一流の博物館人が参加して、博物館の近代化に関連する諸問題が討議される予定であるが、就中博物館職員の研修の問題が重要視されるので、今後実施が計画されている研修コースの設定などに明るい見通しが立ったことは、なによりもよろこばしいことである。

一方、国内の職員研修については、昨年来から始まった第3回学芸員資格賦与の講習は、従前に比べて参加者が44名と多く、順調にすべり出している。今回は前期、後期の二回に分けて講習が行われる関係もあって参加者が増えたことも考えられるが、なによりもこの研修会に各方面の関心が高まってきたことはうれしいことである。

全科協の皆さんの御協力を得て益々充実したものにしたいと考えている。

全国科学博物館協議会理事長

福 田 繁

全科協会員館園の年頭の抱負

熱川バナナ・ワニ園長 木村 亘

植物園が、生きた植物資料の系統保存をはじめ、研究や教育普及を土台とする展示等によって、社会教育の責を果さねばならないのはいうまでもなく、これは近年ようやく一般的に認識が高まり、その方向への努力が払われるようになっていきます。しかし、現在の我が国の植物園は他国のそれに比べ、まだまだ資料不足の感がありま

す。

系統保存もさることながら、全ての基本となる豊富な資料を保有することが緊要と考え、今年度は資料収集におおいに力を投ずる予定であります。

アリタキ アーボレータム園長 有瀧龍雄

(1) 今年は今秋から着手した植栽樹木の一部配置変えな

年 頭 の 抱 負

ど園内整備に努めると共に教育活動も充実いたしたい。

(2) 会社私立館園に対する税法上の優遇措置について、全科協として研究、強力に当局に働きかけて頂きたい。

本年も昨年同様一層の御支援御指導をお願い申し上げます。

伊良湖自然科学博物館長 **伊 藤 務**

(1) 館内の内部充実

当館も4年目を迎えましたので、メインテーマ「黒潮の道」にふさわしい内容であるかをもう一度検討し、内部充実に力を投入します。特に船のコーナーの展示内容の充実を期したい。

・友の会活動の充実

当館の立地条件を考えて友の会活動を積極的に行う。特に観光客の動向を把握し、友の会活動に積極的に参加していただく方針で会の運営を行って行く。

(2) 全科協を通じて各博物館との交流を計り、社会における博物館のあり方を話し合うと共に博物館の活動を広く社会に知らせていただく場として生かしてゆきたい。

愛媛亜熱帯植物園長 **窪 田 義 直**

昨年は役所も退き自由の体となった故、園の内容も充実したいと思っておりましたが、不幸にも病弱となり計画を実行する事が出来ませんでした。本年はアメリカとオキナワの二種のデイコを相当数導入し、6月と8月の2回ヤシの緑を背景に真紅の花を咲かせる景観は実に見事です。此の計画を本年の重点にしておりますから皆様御支援をお願い致します。

NHK放送博物館長 **若 菜 三 雄**

日本の放送も生まれて50年となりました。半世紀の仕事顧みると、諸先輩の労苦が身にしみます。大正14年3月1日「あーあ聞えますか、こちらは東京放送局であります」の第一声が、電波に乗って飛んだ時、みんな手をとりあって、喜んだことでしょう。今年の3月、愛宕山の放送博物館で、記念の催しをいたします。どうぞお出掛け下さい。お手持ちの資料も是非ご寄贈下さい。

大阪市電気科学館長 **辰 巳 博**

(1) 昨年暮に一応第6次改装を終りましたが、経済状況の関係で十分なものとはいえませんでしたので、今年は可能な限り、この不十分であった部分の充実をはかりたいと考えています。

(2) 公害問題、エネルギー危機、資源対策といった難し

い問題に直面しているわが国に於て、理工系博物館が果たすべき役割とその具体的方法の討議ができるようにしたいものです。

香川県自然科学館長 **高 松 美 一**

昭和45年度から広大な五色台の自然の中で、県内中学校2年生が4泊5日の五色台教育をはじめて5周年になりました。

昨年度までは、本館での生物・地学・人文学習を「いかに充実したものにするか」に重点をおいたが、本年度は、館内学習はもちろん、特に、野外学習と館内学習の一体化のため、館の職員が野外学習の指導のため、積極的に館外に出て、ひとりひとりの生徒の課題解決の助言指導をすることにしていきます。

神奈川県立青少年センター館長 **大 胡 満 寿 男**

昭和47年度より4ヶ年計画の展示場改造事業は、予算抑制のため、さらに完成年度を遅らすことになった。本年は人間尊重と物資愛護の精神を特に高揚し、現存の展示品の常時点検・整備による完全利用と、来館者に喜ばれ、より利用度の高い展示品を作製する展示技術の研究、職員の専門的知識の向上をはかりたい。全科協にはお願いするのみであるが、専門職員や講師の派遣、また遊休資材の活用、研究会等技術交換の機会をお考えいただきたい。

神奈川県立博物館長 **高 橋 繁 蔵**

開館以来9年目を迎え、どうやら皆様のお仲間入りが出来ようになりました。今年あたりから活発な事業の展開をもくろんでおりましたが、未曾有の県財政の危機にそう遇し、諸事業にわたって、大巾な削減を余儀なくされております。

しかしその中で、調査研究と、展示は館の生命でもあり、予算以上の効果をあげる所存です。

終りに、全科協が、それぞれ性格の異なる館の、よき集合体として、発展されることを祈ります。

川口市立児童文化センター館長 **織 本 重 義**

この館は、少年たちのため、多彩な文化活動を行っています。もちろん、自然科学はその一つの柱です。今年も、各活動に魅力とともに専門的な深さを持たせ、また展示・教室・特別行事等全館の活動を関連づけ、体系化したいと考えています。

全科協については、当分の間はひきつづき国立科博の

 年 頭 の 抱 負

強い支援が必要でしょう。しかし各館も、たとえば協議会機関誌への寄稿等を通じて、積極的に協議会を盛り上げることに努めなければならないと思います。

神戸国際港湾博物館長 西川 光 一

世相の不安、高物価の趨勢はそのとどまるところを知らないほど深刻になってきました。こんなことでは余暇時代の到来を手ばなしで喜んでおれないのではないのでしょうか。だんだんむつかしくなってくるようです。それに対処しながら地道な活動をすすめていきたいものです。今後とも、全科協のみなさまの御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

交通博物館長 古谷 善 亮

戦後数十年を経て、国民の文化に対する動向も落ちきをみせてきた。その為か古代文化の発掘も行われ、また近代科学の面においても科学博物館の意義も大きくなってきた。当館では、本年は、新幹線博多延長、地下鉄の拡充その他国民生活に必要な物資の海陸空輸送の近代化による内容の拡充に力を入れるが、全科協に望むところは、全科協の各部門を通じ、今後の必要燃料に関心を寄せられるよう、世間の指導をして欲しいことである。

天文博物館五島プラネタリウム

館長 鏑木 政 岐

- (1) 学芸課職員の欠員補充も終わったので、本年こそ「学芸報」の復刊、「見学の手びき」の発刊等、内部の充実を計りたいと思う。
- (2) 全科協職員研修会を通じて学芸課職員の資質の向上を願う次第であります。

郡山市児童文化会館長 影山 熊 男

近頃の子どもは、「友達どうしの協力心がたりない」「友達とのつきあい方を知らない」「何をやらせても長続きしない」などの声を耳にする。

これらの原因の一つには、子ども達が、友達といっしょに話しあい、考えたり、遊んだりする機会が少なくなったからだといわれているので、

今年度の重点事業として、

1. 会館のまわりの空地を利用し、子ども達が心をひろき、のびのびと遊べるようにする。
2. 昔の遊びを復活し、よい遊び方をすすめる。
3. ものをつくったり、情操の心を高めるクラブ活動を積極的にすすめる。

神宮徴古館農業館 幡掛 正 治

- (1) 事務所及収蔵庫の増改築が緊急の課題となっているので、本年はその実現を期すべく努力したい。又、農業館は明治中期頃より農機具の収集を行い、今日相当の数量となっているので、これの、収納並に展示を考慮中である。
- (2) 速報を要するものは、ガリ版でもよいから早く通知するような方法をとられたいこと。

通信博物館長 二宮 健

- (1) 入館者60万体制の定着化
入館者誘致施策の推進を図り、年間60万人以上の観客動員をもくろみる。あわせて創意に満ちた展示活動を行い魅力ある博物館活動を展開する。
- (2) 資料の充実と積極的活用
信頼される博物館活動を目指して、資料の積極的収集と整理保存の充実ならびに調査研究の深化を図る。

東京都児童会館長 熊澤 繁 樹

当会館は、創立以来11年になります。その間、都立唯一の広域児童館として、都内全域の児童に対するサービスならびに区、市立児童館へのセンター的機能という役割を進めてきましたが、今後これらの役割を果たすべく一層努力してまいりたいと思っています。

なお、今年度の重点事業は次のとおりです。

1. 日曜子ども劇場の充実
2. 会館報「東京の子ども」による児童福祉思想の啓発、普及。
3. 区市立児童館に対する援助、サービス。
4. 図書、美術等各室及び屋上庭園の整備。

東京農工大学工学部附属繊維博物館

館長 佐々木 清 文

- (1) 博物館の裏の空地を利用して繊維作物を栽培する。取り敢えず綿、麻等を植え、種子の入手次第草木染に使用される染料植物の栽培まで手掛ける予定である。
・高分子関係の展示品の充実
- (2) 視聴覚教材の有効な利用法、動く展示の製作のための研究会の開催。

鳥取県立博物館長 西本 真 一

- (1) 博物館活動と学校教育活動との連けいを深めるためア 小・中学校の教育課程の具体的な展開を、博物館の展示活動の場で実現するように、効果的な常設展

年 頭 の 抱 負

示に努める。

イ 小・中学校の児童・生徒及びPTAに対する幅広い教育普及活動を実施する。

(2) 全科協の事業として、多額の経費を要する複製標本の作成費に対する国庫補助、全国巡回展の企画等の活動を推進し、加入館に対し積極的な情報と連絡協調の機会を提供する等して、地方の自然史博物館の育成指導を図りたい。

福井市立郷土自然科学博物館長 小林 貞七

(1) 20数年を経た開館当初の展示には飽き足らない。時期からフロアの拡張は立ち消えとなったので、手狭の中で展示の新鮮化、近代化を念願し、その第一歩を踏み出す所存。

小・中学校児童生徒中心の博物館活動の輪を広げ、地域公民館とタイアップして、大人の参加と活動のプランを立案し実施の手筈。

(2) 広範な資料がほしい。全科協の仲介で、資料の交換、同定等の労を取ってもらいたい。

室蘭市青少年科学館長 内海 量夫

(1) 昭和49年度より、中学生以下学習利用の入場料は無料化されたので、通館バス借上料補助の実現に努力すると共に、展示品老朽施設の更新に励みたい。

(2) 過去三年間、各地の貴重な資料を集め、ニュースに紹介し、又実務に密着した有意義な事業研究会を開催下さった、当局のご苦勞に感謝申し上げ、今後共、研究・情報資料センターとしての機能充実を願いたい。

山形県立博物館長 佐藤 信一

開館以来4年を経過し、全面的な展示替を計画している。現在の県民生活とのかかわり合いを重視し、郷土の自然と文化を考え、将来いかにあるべきかを洞察する場にした。教育普及活動と調査研究事業を拡充するとともに、県内の研究団体等との結びつきを強化し、経営参加の機会をつくっていききたい。全科協は、もっと博物館のあり方についての相互交流を推進すべきである。

山口県立山口博物館長 臼杵 華臣

今年は当館が2年に一度ずつ開催する自主特別企画展の年に当る。

タイトルは「山口県の自然史」(案)

期日は10月1日から11月10日まで。

本県は我が国の三大化石県と言われているが豊富な化

石を駆使してその生いたちを探り、現在に生きる生物や自然環境を余す所なく浮き彫りにし、生活舞台としての自然に対する正しい理解の上で人類と自然との調和を明らかにして行こうとするものである。

構成に当っては総合博物館としての特質を生かし、人文・自然両部門からの展示の総合性を目指しているがまことに容易なことではない。

皆様の御指導御援助をお願いします。

労働省産業安全研究所(産業安全技術館)

所長 秋山 英司

博物館界にとって厳しい情勢にあげた昭和50年の年頭にあたり、重点事業としては。

1. 新館開設以来3年を経過した常設展示の整備更新を積極的に進め、教材としての効果を高めたい。
2. 研究所附属博物館としての特殊性にかんがみ、技術情報サービスの充実を図りたい。
つぎに全科協を生かして行く事業として、科学系博物館の技術センター的な機能の確立を望みます。

和鋼記念館長 住田 勇

本年は不況をのり越えて、当館の古代製鉄に関する展示内容を一層充実していきたいと考えております。

このため専門的は勿論、一般参観者の興味をひく資料蒐集も併せて行いたいと思います。

1. 古代の「たたら製鉄」に関する古文書、製品などの入手と、これらの特別展示。特に本年は日本刀に関係した資料に重点をおく予定。
2. 中国地方における「たたら製鉄」の遺跡の調査とその記録の整備。

これには関係地区に所在する全科協会員館園の御協力をお願いしたいと考えています。

3. 全科協のメンバーを地域または目的によって細分しまずグループ毎の連繋を強化すること。

(館園名五十音順)

急速に変わりつつある現在の社会状況に対応してゆく科学博物館としての事業内容に、より一層の深化性が問われている今日、ここに新しい年を迎えさらに躍進への意欲を新たにしている加入館園から(1)今年の重点事業について、(2)全科協をどのように生かしてゆくか、の2項目に焦点をあて、年頭の抱負を寄せていただきました。ご協力を感謝します。

無 関 心 へ の ア プ ロ ー チ (その2)

— 科学に無関心な人と科学館に無関心な人 —

神奈川県立青少年センター 二 宮 健

科学館の経営者なら誰でもより多くの人に来てもらいたいと願わない人はいない。最近ではデパートあたりでこちらが顔負けするような催しをする時代であるから、公立といえどもまるっきり商売気抜きというわけにはいなくなってしまう。いったい科学館などというものがどのくらいの人に知られているものか、まだ一度も調べたことはないが、入館者については数年来館内でアンケート方式によって、いろいろな角度から入館者の意識調査を行った〔註1〕。その結果、始めて来た人は10%弱であるのに、当館の施設や催しものについて「よくわからない」と答えた人が約 $\frac{1}{4}$ ぐらいいることがわかった。入館者の80%以上が地元の横浜市の人だから、全県民について調べたら、これよりはるかに多い数字になるであろう。当館の催しものなどは「県のため」〔註2〕などでくどいほど広報をしているはずなのだが、意外にこういう施設のことは世間に知られていない。当館では館の施設を全県の公平に利用してもらえるように、県下の中学2年生全員を対象に、バスで送迎して実験や見学をする「1日青少年センター」という事業を開館以来すでに12年も行っていて、青少年センターといえば、「ああ、中学生のとき一度来たことがある」という人が多いのであるが、そこまでやってさえこのよのような状態である。したがって、先号に科学技術館の山田氏がお書きになったように、館の経営者が音楽会であろうと人形劇であろうと、とにかくあの手この手で客を集めて、まづ知ってもらうことに腐心するのは当然であろうと思う。そして一度訪れると、私どもの調査でも90%以上がまた来たいと答えており、既に6回以上来ている人が入館者の30%以上を占めていて、この直接眼で見、肌感じて知ってもらうということは客集めにたいへん有効な方法であるから、音楽会や人形劇も場合によっては安い投資と言えるかもしれない。言い替えると、世間には潜在的に科学館の施設に関心を持ってくれる人がまだまだ居ることであって、この人たちは、われわれがアプローチできる無関心の第1グループということになるのか。いや実は入館者の大部分は、このグループの人たちで占められているのであって、彼等は科学より館の施設をショー的な意味で楽しんでいる人たちなのである。このことについて私どもが行った調査によって少し敷衍したい。2年ほど前に当館の科学展示室を見学する人たちを追跡調査したところによると、展示室の平均滞留時間は約30分で、60%はグループで来ていることがわかった。要約し

て結論を言えば、入館者の大部分が良い意味のレジャーとして館を利用していることを示している。このことは、展示の見学態度を追跡してみるともっとはっきりわかる。一般に流し見が非常に多く、一つの展示品が一回の演示を完了するその展示の固有時間までとどまって見学する人は極めて少ない。このような見学者の中で少し際立っているのは親子づれのグループで見学者の17%を占め、見学時間も平均46分と長い。子供のほうは飽きているのに親は体をかがめ、指さして展示の説明文を読んで聞かせている姿は涙ぐましくさえあり、中には説明を克明に記録していく人もあって、良かれ悪しかれ展示を企画した側にとっては、ぐっと科学よりのお客さんである。しかし一般に青少年の好みのタイプは教科でいえば音楽が第1で、つぎが英語〔註3〕というところで、今後望みたい設備としてスポーツコーナー、ゲームコーナー、勉強室、食堂などを挙げる人が多いことから入館者のおよその意識がうかがわれる。

さて、博物館が対象とする広範囲の人たちを考えれば社会教育施設としての役割りはこの程度の浅い啓蒙でも十分だという見方も成りたつであろう。しかし、いつもこれで何となく不満が残るのは、実は無関心の第2のグループとして科学そのものには部分的にせよ非常に強い関心を持ちながら科学館には無関心な人たちが居ることである。科学のある分野については自分の本職以上に関心を持っている人、〇〇マニアと呼ばれている専門家はだしのアマチュア、彼等は案外科学館に寄りつかない。彼等にとって科学館とはいかなる存在なのだろうか。彼等は少数の変り種ではない。視点を変えれば、実は潜在的には非常に多くの人がかこれに入るのである。視点——それは、今日のように膨大になった科学の体系と人の実生活をつき合わせてみたときの余りにも多い隙間、大学や研究所に関わりを持たない素人の研究家、何かを知りたいと思ひながら、それをどうやって手に入れるかわからず手こまぬいている人たち…。彼等の眼に科学館がたんに商品棚か倉庫の類にしか写つらないとしたら社会教育の出番はどうなるのか。いや、それよりも科学館の経営者として、こう現実のニードが受けとめられないのは、まことに残念であるという外はないだろう。このためにはまず科学館の従来のイメージを変える必要がある。昨年コホーテク彗星のことが新聞に報道された際、当館天文室には応接にうんざりするほど問い合わせの電話がかかってきたが、このような例はむしろ少ないのであ

る。たとえば公害の問題などについて考えてみても、大衆の啓蒙のためにいったいどれくらいの役割りを果し果たしたか、またもし科学館にそれを期待されたら、これをどう理解させるか、あるいは適格に回答できるだけの知識の用意があるか、担当者は苦慮せざるを得ないだろう。このような要求は、工業試験所のような専門家からもくる。「そんなことは、あなた方が専門家じゃないですか」と言いたくなるが、それが存外駄目らしい。そしてわれわれも同様なのである。よく情報センター機能ということが言われるが、もし大衆が科学館に対してそのようなイメージを持ち、館側にそれだけの用意があるならば、これだけでも従来とはかなり違った活動が生じ、館の利用層はもっともっと厚くなるのではなからうか？しかしまだ道は遠い。そして、社会教育の中で科学の果

す役割りという大きな問題を前にして、全科協のような組織体がもっとしなければならぬ仕事が出ているような気がするのである。

〔註1〕 当館は非常に多目的な施設を含んでいるが、本文の性格上、科学館的施設について主に記す。

〔註2〕 「県のたより」とは神奈川県庁広報課編集、通常の新聞2～3ページ分ぐらいのもので毎月発行され各戸に配達される。広報の効果はこれが一番よい。

〔註3〕 少し変わった調査で、あなたの好きな教科は何ですかというアンケートによる。この結果は平均値、男子と女子で異なり、中学生と高校生ではまた違う。中学生男子では理科が第1位で64%。

入館者増加へのアプローチ

——よりよく、より多き理解を得るために——

通信博物館 樋口次郎

通信をテーマとした通信博物館（コミュニケーション・ミュージアム）はその歴史も古く明治35年に設立された。したがって所蔵資料も多く、郵便切手類（内・外国を含め）674,000点、駅通関係他一般資料32,000点、図書22,000点、および写真資料14,000点等である。この膨大な資料の整理・保存・調査研究を行い、研究した成果を展示を通して一般に公開し、1人でも多くの人に利用して貰えるよう願っている。

当館が現在地（千代田区大手町）に新装開館したのは昭和39年12月である。交通機関（地下鉄4線の交差駅に在る）に恵まれた当地で、しかも展示場は1階から3階まで（5,726㎡）あり、冷暖房その他の設備も完備されている。このように恵まれた博物館であるが、その割には入館者が思うように増えないというのが実態であった。当館の内容等から判断して年間入館者は当面60万人程度は見込みたいものである。そこで、昭和47年度より重点施策の一つに観客誘致施策を加えて入館者の増加を図った結果、当館における入館者数は、別表にもあるようにここ1,2年急激に増えている。当館が行った観客誘致施策が他館の参考になるかどうか、ともかく博物館を利用して貰うよう各方面への積極的な働きかけと、魅力ある博物館活動の展開を図る種々なアイデアを駆使した催事等をここに記し、この施策に関する各館園の御意見、アドバイス等賜われれば幸いです。

1. 周知活動

(1) 教育委員会、学校との連絡の強化

博物館を利用する見学団体の大半は学校からの校外

学習としての来館が多い。しかし学校によっては博物館施設をまったく利用しないで観光施設等の見学で終始している学校もまた多いのである。そこで教育委員会、学校へ直接訪問し博物館利用を促進している。まず都府県教育委員会へ次に市町村教育委へ行き各地域の校外学習の実情を伺い博物館の周知を行う。一方学校訪問については各地域の校長会長校、社会科担当部長校を訪問し各校への周知をお願いする。ある時は校長会会議場へ出向し博物館の利用を契めることもある。こうして博物館見学の第一歩を踏み出した学校は以後毎年見学に訪れるのである。

(2) 報道機関への周知協力の依頼

博物館をPRするのに膨大な広告費を支払うほど博物館財源に余裕はない、そこで博物館ニュースを、取材記事に、社会ニュースに、お知らせ欄に等々取り上げて貰うよう常に密接な連絡（郵送・電話・訪問）をとって協力を願っている。無関心層へは格好のアプローチと確信する。

(3) その他

当館の母体は郵政省である。全国の郵便局長に依頼し、近傍の学校、各種団体等へ積極的な働きかけを願っている。最近においてはこの効果も現われてきている。

2. 近傍新聞社との連携

都内および近隣の小学校では校外学習に新聞社見学を実施しているのがかなりある。当館の周辺にはサンケイ、読売、毎日の各新聞社があり、団体見学を奨励

している。このようなことから当館と上記三社と連携し「通信と報道」をテーマとした同時見学会を実施している。この企画は大いに当り、各学校から好評を博している。

3. 博物館友の会の育成

小・中学生を対象とした友の会を結成。会員数は5,300名に達している。会員には各種催物を通知する他、郵趣のつどい、切手教室、電信電話教室、テレクラブ等への積極的参加を呼びかける。

4. 夏休み子供大会

夏休みになると博物館で閑古鳥が鳴く、いつしかこのような言葉がささやかれた。マスコミは海や山の賑いや、母親が子供達の宿題の材料をデパートで買い求める様子を盛んに報じている。夏休みにおける宿題や家庭学習に博物館を利用しようとしなない。このような現象は博物館のPR不足が原因しているのではなからうか。

当館では48年8月に「夏休み子供大会」を試みた。1階特別展示場へ特設舞台を設け、博物館で1日中楽しく過ごせるよう配慮した。その内容は講演会、図工教室、音楽会、ぬいぐるみ劇、エレクトーン演奏、映画会等10日間にわたって実施し、1日平均3,000人余の入館者があった。これら人々のほとんどが2,3階の常設展示場をも見学し、博物館存在の認識を新たにしたことであろう。この子供大会は49年8月にも12日間にわたって実施し前年にも増しての盛況であった。

5. 資料の充実と積極的活用

上記各施策を行う一方、博物館の命脈である資料整備には、下記3項を遵守し、魅力ある博物館活動の根元として特段の配慮をしている。

- (1) 資料の積極的収集と調査研究の深化
- (2) 資料活用の活発化
- (3) 資料の整理保存の充実

6. 入館者利用施設の整備

入館者が増えるに従い館内各施設の整備も倍旧の配慮が必要となり、特に防災設備の点検と防災訓練の充実を図って入館者が安心して楽しく過ごせる環境をつくるよう心掛けている。

別 表

年 度	入 館 者
40	212,775人
41	178,943
42	174,147
43	223,388
44	252,442
45	209,626
46	270,805
47	302,021
48	494,856
49	605,937

(注) 49年度は12月末現在

電 気 科 学 館 の 第 6 次 改 装

大阪市立電気科学館長 辰 巳 博

大阪市立電気科学館は去る12月20日、第6次改装を終え、大阪市長以下関係者や出品協力の各業界代表などを招いて披露式典を行い、翌21日から一般市民に新しい装いでお目見えした。

電気科学館は昭和の初期、当時の大阪市電気局が電灯市営十周年記念事業の一環として計画し、昭和12年3月に開館したもので、当初は東洋でただ一つのプラネタリウムを有するとともに、未来指向型の新しいサイエンス・ミュージアムとして全国的にも有名であった。(未来指向型の理工系博物館に対して「科学館」という名称を用いたのは大阪市が最初であると自負しているが、もし間違いであればご連絡願いたい)。しかしその後第二次大戦に伴う混乱や、戦後の急速な技術革新の中で、施設の老朽化や展示の陳腐化が目立つようになったため、昭和29年に関係業界や在阪諸官庁の援助を得て最初の大改装を実施し、以後引続き3～5年に一度ずつ、時代の進展

にマッチするよう大改装を行って来て、今回第6回目を数えることになったわけである。

今回の改装で特にねらったことは、従来の単に知識や情報を与えるだけの形を脱し、幾分なりとも考える場たらしめようとしたことであるが、充分には果たせなかった。同時に子供が理屈抜きで楽しみ、これによって科学技術への興味を芽生えさせるための配慮も忘れぬようにした。新たに登場した展示物の中で、特に注目を引くものとして、次のようなものがあげられる。

(1) 太陽エネルギー解説装置

三階の入口正面に大きなパノラマを設け、エネルギー源としての太陽の偉大さや、その効果的な利用の可能性などを、太陽電池の実物による模型電車の走行実験を交えて解説する。電車の速度は電池を照らす電灯の明暗を制御することにより変えられるようになっている。

(2) 大阪市民の足、これまで・いま・これから

大阪市電創業以来、市営交通機関が時代とともにどのように移り変ってきたかを、時間目盛とともに写真や模型を織りまぜて解説し、併せて今後の都市交通は「システム化、にかかっている」という事実を考えさせるよう、問題の本質と解決の方向付けをKJ型（川喜田二郎氏の頭文字）パネルで示した。

(3) コンピュータ・コーナー

ミニコンピュータの実物と、コンピュータによる計算の進め方解説装置とを並べたもので、特に後者はツルカメ算を例にとり、コンピュータ内部で計算が進められる過程を、光と音の流れで明確に理解できるよう考案したユニークな装置である。これに加えて、引続き2進法の原理と、2進数が電気回路のON、OFFに対応することにより演算が可能となることを示す装置の実現を計画している。

(4)マジック・ルーム

別名「透明人間」の部屋と称し、いろいろなからくりを応用して、あたかも透明人間が種々の動作をしている如く演出する。子供が理屈抜きで楽しむとともに、大人にもそのトリックを考えていただくかという趣向である。

以上は電気館の展示であるが、天象館にも今回の改装に合わせてスカイライン投影器を設置し、プラネタリウムの効果を高めるようにした。但しこの方式は名古屋科学館の前例にならっているので、詳細は省略する。

大体以上述べたような内容により、ここ数年間やや低調気味であった当館の展示は、格段の充実をみることとなり、各方面から多大の反響を呼ぶことが期待されている。

アメリカ全科協の紹介

国立科学博物館 鶴田 総一郎

“The Association of Science-Technology Centers” (astc と略称) が1973年に正式に誕生した。科学系の博物館の専門的会議の必要性は、アメリカ博物館協会(American Association of Museums, AAM と略称) 内部で1960年にはじめて間も無く特に強く叫ばれはじめ、AAM 会議と併行してこの種の会合が持たれてきたが、これが独立の協会になった訳である。その経緯は全科協と全く軌を一にしている。まだ会員数も50館余、“astc newsletter” も、Vol. 1, No. 1 が昨年10月に発行されたばかり。これからの発展が期待される。

現在実行されている仕事は概要次のとおり。

1. 展示計画実務講座 既に3回終了、4回目募集中
2. ルーズリーフ式博物館参考便覧 ①合衆国科学技術博物館ガイド、②科学技術センター関係文献一覧、③外国科学技術博物館便覧、④合衆国デザイナー一覧、⑤科学技術博物館野外活動の手引き、および⑥科学技術センターに関する文献の抜刷りの6項目についての情報連絡用。

3. astc の委員会

① 教育委員会 さらに6分科会になっている(詳

細略)

- ② 財政委員会 どうして資金を獲得するか委員会。
- ③ 認定委員会 AAM で公認する博物館にはいろいろな援が公私から可能になっている。この公認の仕事のうち科学技術系博物館については astc が受持つことに AAM と協定が成立。このための委員会。

唯今のところ以上の3委員会がいわば事業委員会として活躍している。

このastcの特徴は、いわゆる博物館仲間の協会であると同時に、アメリカ科学教師協会(the National Science Teacher's Association)、教育研究および情報センター(Educational Research and Information Center, ERIC と略称)、アメリカ科学振興協会(the American Association for the Advancement of Science, AAAS と略称)等の関連団体と密接な連携のもとに事業を推進していることである。

全科協としても、astcとは今後特に連携を密に行うことが必要かと考えられる。

 全科協北から南から

秋田大学鉱山学部附属鉱業博物館

—あゆみ—

高安泰助

丘陵の、平地から約16mばかり小高い中腹に、緑の杉林を背にした白亜の建物は、円型と角型の調和もよく、その前庭に立てば日本海に突き出す男鹿半島や遠くには秋田富士とも呼ばれる鳥海山も望まれ、秋田市の観光コースに入れられる程の名所にもなっているが、これについて語るにはどうしてもその歴史から始めなければならない。

明治43年現秋田大学鉱山学部の前身である秋田鉱山専門学校が創設された時に地質関係標本を主とした列品室が設けられ、その後逐次整備充実されて本邦有数の標本室となったが、昭和16年不幸にも列品室の階上にある物理実験室からの出火により全てが焼失した。また終戦時に学校の一部が米軍に接収されるなどの逆境にもめげず再興を計り、昭和26年新制大学発足とともに鉱山博物館の名で再開され、翌年これが国立博物館相当施設の指定をうけた。

昭和36年鉱山学部の創立50周年記念事業として卒業生・在学生・現旧教職員・鉱工業界・地元県市町村・篤志家などの協力により現在の博物館を新築し、名称も鉱山博物館から鉱業博物館に改称した。完工は9月30日でのこの時の事業報告書を見ると、昭和32年10月立案と同時に実行に移されているから満4年をかけたことになるが、当時で1億4千万円を要した建設費が全て寄付金によってまかなわれ、また玄関前の8トンと5トンの庭石は無償提供であり、他に寄付された資料も数多く、工事も裏手の山を削り更に地下8mの岩盤を掘り起こすなど雪中の突貫作業は難渋を極め、いかに苦勞されたかが推測できる。昭和40年に鉱業博物館の全施設が国に寄付採納され、改めて秋田大学鉱山学部附属鉱業博物館として現在に至っている。

建築面積延3,663㎡の博物館は前述のように円型3階建の列品館と角型4階建の研究館に大別される。研究館には16の研究室と図書室および資料収蔵庫・石工室・資料整備室・工作室・配電室・ボイラー室・倉庫等があり、資料収蔵庫には約4,000点余の資料が納められ、研究室では博物館の眼下にある鉱山学部の教官・学生が学部における研究とあわせて日夜研究を行っている。列品館は館長室・事務室・応接室・会議室と1,563㎡の陳列室・休憩室・講堂からなり、吹き抜けの中央ホール床は大理

石で3色を用いて雪の結晶を模様づけしてある。一階陳列室には日本列島最古基盤岩類や秋田県の地層に関する資料・秋田県の鉱産物・鉱業に関する古絵図それに化石が時代別に展示してある。二階陳列室には鉱物の外形・物理性・成因による分類あるいは化学組成による分類・結晶系による分類また金や銅など鉱物によっての鉱石標本を分類展示してあり、宝貴石コーナーでは天然や人造の加工研磨された標本が原石と並べられて一般見学者にはすこぶる人気があるようだ。三階陳列室には横窓がなく上方から反射により採光するように造られているので外壁面にそって大型のものも展示可能であり、高さ4m横10mに及ぶ25万分の1日本地質産立休模型や鉱山・坑道・石油掘削模型それに試錘機・水力採炭機・ビット・坑内照明具・各国の原油・鋼材・石英ガラス製品等の実物標本また各種パネルも展示している。陳列の標本は約2,500点で一般公開をし、特に4月下旬から11月上旬までは休館日をもうけず連日9時から16時まで開館して見学者の便をはかっているが、年間1万3千人位が来訪する。円型の陳列室は各階とも間仕切りがなく一室として使用し、展示に余裕をもたせた大型の標本を自由に見て回られるのが本館の特徴の一つかも知れない。また例外にもれず人員や予算面での悩みはあるが、学内や同窓生等からの絶えない協力によって資料が充実されてゆくのは伝統の強みでもあろう。

陳列や博物館活動に数々の問題が残されてはいるものの、今この建物に隣接して文献資料館建設の計画が進められている。近年鉱業の衰退が著しく、閉山が相継いでいて各種プロジェクトの資料・設計図・地質図・坑内図その他関連事項の貴重なペーパー資料が散逸の機にあるが、再び入手不可能なこれ等記録を収集・保管して広く学内外の研究利用に資するための文献資料館は現在の博物館と共にその意義大なるものと信じている。幸にもこれ等文献資料の持つ価値が各界から認められつつあって事業遂行に心強さを覚えるのであるが、勝手ながらこの紙面をお借りして各位にも御協力と御後援をお願いする次第であります。

(秋田大学鉱山学部附属鉱業博物館 主事)

会 員 館 園 の 紹 介

松 島 水 族 館

所 在 地 宮城県宮城郡松島町浪打浜18
道 順 国鉄・仙石線松島海岸駅下車徒歩3分
運 営 私立・仙台急行株式会社 館長 西篠繁雄
入 館 料 大人 350円 高校 250円 小中学生 150円
 幼児 80円 3才以下無料
 (団体30名以上) 大人 280円 高校 200円
 小中学生 100円 幼児 50円

建物の構造 鉄筋コンクリート1部2階建
 1階
 水棲生物展示水槽 機械室(ポンプ ボイラー 冷凍機) 調理室 休憩ホール アシカショープール
 2階
 水棲生物展示水槽 魚博士なんでも質問コーナー レクチャーホール 変電室 研究室 自家発電室 その他

展示物概要
 哺乳類 2種 4点
 鳥 類 6種 19点
 爬虫類 5種 13点
 魚 類 125種 3,650点
 無脊椎動物 83種 1,300点

沿革特徴 昭和2年4月松島湾の魚介類を収容して開



館, 昭和30年博物館相当施設指定以後熱帯魚館, アシカプール, 海ガメプールを増築して来ましたが, 施設の老化の為, 昭和48年7月より新築工事に入り49年4月再度オープンしました。

特徴として水槽内を広く見せる工夫をこらし, 展示方法にも特殊な配慮がはらわれ動物達を自然の状態での飼育を主たるテーマにしており, 見て楽しめる魚の公園として, また自然保護の多面的な観察の場として皆様の御満足を得るものと思います。

— 第4回全科協博物館事業研究会開催のお知らせ —

昭和49年度全科協博物館事業研究会は下記によって実施する予定ですのでお知らせします。

1. 研究テーマ 無関心へのアプローチ
2. 会 期 昭和50年2月26日(水), 27日(木), 28日(金)
3. 実施内容

生涯教育の推進, 週休2日制実施の拡大, 余暇利用等の問題がクローズアップされ急速に変わりつつある現代の社会状況に対応して科学博物館はどのように対峙していったらよいか, 今回はこれらに関連する利用者側および博物館側の問題点を整理し, 同時にこれら

を解決するための方策として, 具体的資料にもとずき利用者の把握の方法, さらに利用者の増大を方法などについて研究討議する。

- 4 会 場 国立科学博物館(東京・上野)
5. 対 象 全科協会員館園職員であればどなたでも参加できます。

なお, 日程等の詳細は実施要綱を別送しますが, 日ごろ当面している諸問題をまとめ, 研究討議を行ない今後の博物館活動の一つの指向性をもたせたいと思いますので一人でも多く参加し, 活発に意見の交換をされることを希望しています。